
happy merry go christmas

中路太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

happy merry go christmas

【Nコード】

N3513T

【作者名】

中路太郎

【あらすじ】

街中にある洋食店「クリスマス亭」。このお店には一年に一度だけ定休日があります。それは店名にもなっている一年で一番ハッピーな日。没作です。事情は読んで当ててください。多分すぐ分かると思います。……まさか書いてるその年にフリーになるとは……。

（前書き）

このお話はフィクションであり、実在の、個人、団体、ファンタジ
ー的な存在とは、一切関係がありません。

その日、空には雲一つない代わりに、薄い靄がかかったように星明りも見えなかった。

街のイルミネーションが光の道を塞ぎ、地上には手一杯に持たされたような眩さがあふれかえっている。

そんな街中にある洋食店、クリスマス亭。

ディナー客も完全にはけ、厨房の火も落とされた店内は、静かに次の出番に控えていた。

店の名前にもなっている明日の日を定休日に行っているこの店では、実はこれからの時間が一年で最も忙しくなる。

「お祖父ちゃん」

来客を知らせる扉のベルが鳴って、ダウンコートを着た大学生くらしい女の子が薄ら寒い店内に入ってきた。

茶色のマフラーをした一見して地味な印象の彼女は、ほとんど椅子のあがった客席にポツンと腰掛けてテレビを見つめる老人に近づいた。

「もうみんな待つてるよ」

明るい声で肩に触れられて、ゆっくりと老人は振り返った。

七割くらいを和毛のような白い柔らかなもので覆われた顔が、彼女の方を見る。

「ぐくりと唾を飲み下すと、猫じやらしのような眉が上がり、鋭さを持った瞳が覗いた。」

ただ事ではないその様子に彼女は首を傾げる。

「どうしたの？」

「ゆ、由真……大変じゃあ、た、滝川クリ。テルが、中継に出ると枯れ木のような手で、彼女——由真の手を握った老人は、反対の手でテレビを指差した。」

見ると、確かに某人気キヤスターが、大きなツリーのイルミネー

シヨンの前で中継をしていた。

クリスマスの人出をレポートしているのだが、世に吹き荒れる不況の風もなんのその、若いカップルを中心に例年のそれと比べて劣る事もない。

「本当だ。珍しいね」

いつもはスタジオで、なんだか斜めになつてゐる所しか見たことがなかったので、言われてみれば珍しい光景だ。

由真は笑顔を作つて老人の手を握り返す。

「大丈夫だよ、ちゃんと録画してるから」

普段なら次の日の仕込などで、この時間のテレビを老人は見ることが出来ない。

その為、この女子アナの出ているニュースショーをビデオ（ディスク媒体を老人は扱えない）にとるのが、日頃の彼女の仕事の一つだった。

クリスマスイブに特に予定も無く、祖父のためにビデオ予約する現状は正直どうなんだって感じたが、それでも今日は特別な日だ。

恐らく今夜一番忙しい人物に対して、些細な不満など漏らせようはずもない。

そう思いにこりと微笑んだ孫娘に、今にも泣きそうな顔で老人は哀願した。

「み、見にいつちゃダメかの？」

「はあ?! 何言つてんのっ? 今日が何の日か知ってるよね?」

問われて、老人は蚊の鳴くような声で返事をする。

「……………クリスマスイブ」

「そう! 後何分かでクリスマスだよ!!」

「……………って言つても、日本人とか……………クリスチャンそんな居ないじゃん……………クリスマスなんかイベント感覚じゃん……………」

「日本人が日本でどんなクリスマス過ごそうと勝手でしょ!」

「寂しい言いようじゃのー」

少女の剣幕に押されながら、老人は拗ねたようにヒゲをプチプチ

抜き始めた。

「そんな事言われても……クリスマス毎年あるし……なんたって生中継じゃし……」

「お祖父ちゃん……っ……このっ！　うすら馬鹿っ！」

半世紀近く年の離れた人間に、べちこーんとおもつくそ頬をはられて、老人は椅子から転げ落ちた。

ごろごろーと転がってイミテーションの暖炉にごちんと頭をぶつける。

季節はずれの大きな紅葉の咲いた頬を抑えながら顔を上げて、老人はぎよっとした。

由真が、涙を流していた。

決して、今年も独り身だった自分を哀れんでのものでは無い。

「ゆ、由真」

悔しそうな孫娘の泣き顔に老人はかける言葉が見つからない。

やがて絞るような声が聞こえて来た。

「きよ、きようはクリスマスなの……一年で今日だけは誰でも無条件で幸せになって良い日なの。そんな日に、お祖父ちゃんだけは絶対そんな事言っちゃダメでしょ」

そう言ったきり俯いてしまった由真を見て、驚きから上がっていた老人の眉がユックリと降りていった。

そのまま普段の優しい顔に戻る。

「……そうじゃな……」

老人は立ち上がると、そっと孫娘の肩に手を置いた。

「ワシが、間違っておったようじゃ。すまんかった。……少し嫌気が差していたのかも知れんな」

「お祖父ちゃん……」

顔を上げた由真に、微笑んで見せた老人は窓の外の景色を見た。

窓外には輝くイルミネーション。

どこか浮ついた雰囲気、そこから流れるクリスマスソングが、道行く人の足取りを軽くしている。

「毎年毎年、どれだけやつても、どの家に行っても、ビスケットとミルクビスケットとミルク。まともな評価どころか、クリスマス以外には話題に上る事も無い。珍しく名前が出てきたと思えば、ビツクフットとほぼ同じ扱いの論争……！」

どこか遠くを見ている老人は、つらつらと不満を語っていく。相当溜まっているものがあつたのだろう、悔しそくに握った拳がそれを物語っていた。

「しかし、そんな事は些細な事であつたのじゃな。ただ、子供たちの喜ぶ顔、それを見られれば幸せなんじゃ」

「お祖父ちゃん……」

シワシワの指が、由真の頬から涙の粒を掬った。

「ほら、今日は誰でも幸せな顔をしたらんとダメなんじゃろ？ そんな顔をしないとサンタに笑われてしまうぞ」

くすぐったそうに片目を細める由真に、老人はウインクを投げた。いかにもやりなれていないギャップのあるその仕種に、思わず微笑んでしまう。

「サンタって……自分でしょ」

由真は立ち上がると、コートのポケットから帽子を取り出した。赤く年季の入った三角の帽子。

丁寧にそれを祖父の頭にかぶせると、頬に小さくキスをした。
「ほっほっほっ」

照れたような由真の頭を撫でて、老人は扉の側に立った。

ノブを回して、体を外に出す。

ベルが鳴り、扉が閉まる瞬間、老人が隙間から顔を出した。

「由真」

「何？」

優しい空気の流れる店内に、老人がもう一度微笑みを投げる。

「メリー……クリスマステル」

「てめえ行く気だろ」

手を伸ばすが、ボタンと勢い良く扉が閉まり、あっという間に大

きな足音が遠ざかっていった。

慌てて表に出ると、既に赤い背中では遥か遠くで小さく踊っている。

「おおーほっほっほっ」

「戻って来いじじいイイイイイイイ!!」

こうしてこの年のクリスマス、笑うセールスマンみたいな笑い声を残して、サンタは滝川クリ。テルを見に行ったのだった。

（後書き）

昔、たまには季節感溢れるものを、と思って書き始めたお話なんです。が……まさかのフリー……。元々このダジャレが言いたくて書き始めたんで一気にモチベーションがゼロになった思い出があります。

ちなみにこの後ヒロインがヤ。ザみたいな九頭のトナカイと共にプレゼントを配るって言う話だったんですが……まさかのフリー……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3513t/>

happy merry go christmas

2011年5月17日22時55分発行